

Book List ～沖芸の先生による、今読むべきこの15冊～ Vol.11

組踊・琉球芸能に親しむ (知る・考える)ための15冊

選者：鈴木 耕太

(芸術文化研究所) 琉球文学・琉球芸能論・琉球文化研究

県立芸大の先生が
選ぶおすすめ本!



『組踊入門』 宜保榮治郎著

沖縄タイムス社 2004年

K/76/G42/

本書はその書名からもわかるように、まさに組踊の「入門書」の役目を果たしている。著者はこれまでの組踊に関する書籍は研究書に比重が置かれていることを鑑み、「いわゆる一般の方にわかりやすく書いた入門書」として発刊したものである。内容は玉城朝薫の「組踊五番」に加え「手水の縁」「花売の縁」「万歳敵討」のあらすじと台本文、そして逐語訳が記されている。巻末には沖縄県教育委員会が悉皆調査した資料や、「組踊の歴史と様式」「組踊の概要」がまとめられ、組踊に関する基礎資料としても活用できる良著である。



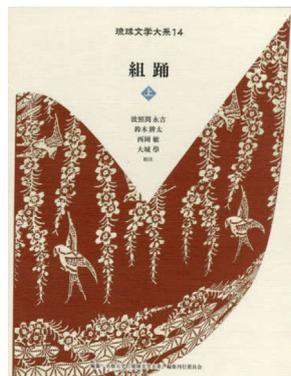
『沖縄芸能文学論』 池宮正治著

光文堂 1982年

K/76/I33/

琉球文学研究者である池宮正治による本格的な琉球芸能論集である。書名にも「文学論」とあるように琉球芸能を文学の視点から捉え、さらに歴史資料などを駆使し、これまでの芸能論から一步、新たな学問の領域に押し上げた名著といえる。琉球古典芸能がどのように生まれ、そして「古典」はどのように変容しながら伝承されてきたのか。このような池宮のまなざしは、現在の琉球芸能を研究する上で、基本的な考えとなっているといえる。

特に「V組踊と歌劇」では組踊の発生論から歌劇の誕生と発展までを論理的に示している。ここで池宮は単に組踊だけを研究対象とはせず、次世代に誕生する新たな芸能との関係を示し、琉球芸能はどのように生まれ、発展するのかを論じている。巻末には「近代沖縄演劇略年表」が収録されている。



『琉球文学大系 14 組踊』 名桜大学

『琉球文学大系』 編集刊行委員会編

ゆまに書房 2022年

K/90/R98/14

本書は琉球文学のテキストをはじめて体系化するシリーズの第2回として発表された。収録内容はいわゆる「尚家本」といわれる王府保管の唯一台本である首里王府編「組踊」(尚家文書31)から7作品、『校註 琉球戯曲集』より8作品収録し、テキスト本文と逐語訳、頭注には語注を施し、組踊を読み、理解するための良書といえる。巻頭には組踊についての概論、組踊の読みについての論考を収録。巻末には組踊の重要語句についての語注、使用音曲解説、衣裳についての解説が収録されている。さらには他の台本との校合結果も収録されており、組踊のテキスト研究や上演研究に欠かせない資料的価値がある。組踊研究についての最新の知見が注がれた書で、今後の実演家や研究者にとって基礎となる文献であると位置づけることができる。

公立大学法人

 沖縄県立芸術大学
OKINAWA PREFECTURAL UNIVERSITY OF ARTS



『**組踊がわかる本II**』
大城立裕監修・漢那瑠美子漫画
沖繩文化社 2005年 (IIは2007年 K/76/KA57/2)

朝薫五番をはじめとする組踊の物語を漫画で紹介したものの。「組踊とは何か」「組踊の特色について」「地方に広まった組踊」を巻頭に短く説明しており、小学校高学年年から楽しめてくれる内容である。すべての作品の最初にあらすじと音楽の紹介がなされている。巻末に資料として朝薫年譜・人物像・代表的な組踊演目名一覧 64 作品の紹介がある。続編のIIには万歳敵討をはじめとする 5 作品が収録され、付録として女踊り・按司・若衆・波平大主道行口説の衣装解説がある。

K/76/KA57/



『**朝薫祭組踊創作 260 年**』
琉球新報社・沖繩芸能連盟編
1977年

この資料は書籍ではなく、昭和 52 年 6 月 1 日から 3 日まで三日間開催された新報ホールでの舞台パンフレットである。これは昭和 48 年に「玉城朝薫誕生之地碑」が建立された際に公演できなかった舞台を、組踊創作 260 年の節目として那覇市民会館で上演したものである。本書にはその時上演された組踊の「演出メモ」が初代親泊典興(執心鐘入)、初代宮城能造(銘苺子)、金武良章(二童敵討)によって記されている。組踊の上演に「演出」がつくのは現在の上演において普通である。しかし、このような「演出メモ」は掲載されないことが多い。名優たちの演出方法を学ぶことができる貴重な資料である。

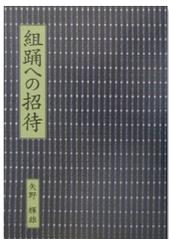
K/76/R98/



『**花の幻—琉球組踊十番**』大城立裕著
株式会社カモミール社 2007年

作家である著者が手がけた「新作組踊」の作品集である。各作品には「エッセイ」が掲載され、そこに作品のヒントとなる出来事や考え方が記されている。本文は組踊の詞章と音楽・歌詞(琉歌)が上段に、下段にその逐語訳が記されており、組踊の詞章の意味が理解できない者でも内容がわかるようになっている。近年、「新作組踊」が毎年のように発表されているが、作品集はこの大城の著作(後に『真北風が吹けば』を発表)を除いて出版されていない。今後の実演家達による「新作組踊作品集」が発表されることも祈念して、一読していただきたい書である。

K/92/O77/



『**組踊への招待**』矢野輝雄著
琉球新報社 2001年

本書は、琉球新報に掲載されたコラムを元に、加筆・修正を加えて上梓されたものである。本書の第一部は 11 章からなり、組踊の発生、作者、王府の組踊と地方の組踊、組踊の約束事、音楽など、さまざまな視点から解説されている。また、筆者は大和芸能に造詣が深いため、組踊と大和芸能との比較や影響関係について、詳細な資料とともに論が展開されており、読み応えのある一冊となっている。第二部では 21 作品の組踊作品の詳細な作品鑑賞が記されており、みどころやテーマなどが示されている。さらに巻末には「組踊関連年表」と索引があり、研究者にも使いやすい本である。

K/92/Y58/



『**沖繩芸能のダイナミズム**』
久万田晋・三島わか編
七月社 2020年

沖繩の芸能を研究対象とした若手研究者を中心とした論考集である。琉球の各地で伝承されている「民俗芸能」、琉球王朝時代、王府によって生み出された「宮廷芸能」、近代以降大衆によって愛された「大衆芸能」など、王府時代～現代までの広大な時間軸を舞台に、沖繩の人々のアイデンティティとしてありつづけた「沖繩芸能」の 300 年を、エイサー・三線・組踊・八重山芸能・ラジオ放送といった様々なトピックから描き出している。

K/76/Ku32/



『**焦土に咲いた花**』琉球新報社編
琉球新報社 2018年

本書は琉球新報に連載された企画をもとに、加筆・修正を加えて出版されたものである。琉球芸能がいかんして「戦争」を生き抜いて、現在のような隆盛を迎えたのかについて、琉球政府の記録や資料、実演家達からの聞き取りを通して多角的に捉えている。本書を読めば今日ある琉球芸能の隆盛は平坦な道のりではなかったことが理解できよう。本書からは時代とともに翻弄されながらも、運しく、そして時にはたかたかに伝承の灯火を消さずに続いてきた琉球芸能の姿が垣間見られる。

K/77/R98/



『**週刊人間国宝**』[芸能・音楽 5 組踊] 52
朝日新聞社 2007年

本書は 2007 年当時の琉球芸能に関する人間国宝 5 人の芸歴や人となりを紹介したもの。それ以外にコラムとして池宮正治が「組踊の創始者・玉城朝薫」を、大城學が「玉宮芸能と市井芸能、そして民俗芸能」を執筆している。どのコラムも一般向けに簡潔でわかりやすく書かれており、組踊を中心とした琉球芸能について知ることでできる雑誌である。また、それぞれの人間国宝に対して芸に対するひたむきな人柄や、その人生などが垣間見られ、琉球芸能を身近に感じることができている。

K/76/SH99/52



『**沖繩多良間島の組踊**』
當間一郎・友利安徳編
那覇出版社 1973年

本書は国の重要無形民俗文化財に指定されている多良間島の「八月踊り」に供される組踊を紹介したものである。組踊は宮廷芸能だけでなく、沖繩各地で現在でも大切に伝承・上演されている。地域の組踊を扱った著書が少ない中、本書は多良間に伝承される「忠臣仲宗根豊見親組」をはじめとする 4 作品の組踊写本の影印と翻刻、そして上演写真が掲載されている。写真と貴重な組踊写本を同時に見ることで、古くから地域で大切に組踊が継承され、息づいていることが伝わる。多くの実演家にとって組踊が「求められる」環境を感じることでできる書であろう。

K/92/TO49/



『**校註 琉球戯曲集**』(復刻版) 伊波普猷編
榕樹書林 1992年

本書は昭和 4 (1929) 年に春陽堂から出版されたものを、榕樹書林が復刻したものである。序文に折口信夫、付録には戦前の研究者達の組踊論考が収録されている。本文は 1838 年に行われた尚青王冊封(通称「戌の御冠船」)の仲秋宴・重陽宴に上演された琉球舞踊と組踊、御冠船芸能の翻刻である。これだけまとまった前近代の資料はなく、さらに研究論文がまとめられた著書は組踊研究史上、本書以外にない。したがって、組踊研究をする際には必携の本であると同時に、実演家や一般の方には王国時代の琉球芸能の一端を垣間見ることのできる資料ともなる本である。

K/92/I25/



『**琉球組踊玉城朝薫の世界**』犬飼公之著
瑞木書房 2004年

本書はそれまでの組踊研究を俯瞰し、「劇文学」という視座に立つて組踊を研究したものである。組踊の創始者である玉城朝薫の家譜や周辺資料を中心に、「作家」玉城朝薫がどのような意識を持って作品を創作したのか、また、その生み出した朝薫五番のテーマは朝薫のどのような人生から生み出されたのかを追求している。筆者は朝薫の創作した組踊をあくまで「文学作品」として捉え、「作家」朝薫が表現した文学性を読み解こうとしている。芸能として研究される組踊について、劇文学として捉えることで、組踊の新たな魅力を引き出そうと試みた良著と言える。

K/92/Ta77/



『**モモト VOL.41 特集/組踊**』
編集工房東洋企画
編集工房東洋企画 2019年

1719 年の組踊初上演から 300 周年を記念して、雑誌「モモト」による組踊の特集号である。民俗芸能として伝承される多良間島の組踊や、国立劇場おきなわの「研究公演」、さらには新作組踊作家である大城立裕へのスペシャルインタビュー、そして 300 年の歴史を研究者が解説した「組踊上演史のいろは」、「組踊 戦後の系譜」、「女流組踊の今」など古今東西の組踊について余すところなく取材した保存版。組踊や琉球芸能を知りたい人へおすすめの一冊。

K/05/Mo28/41



『**組踊の歴史と研究—組踊本の校合から見えるもの—**』鈴木耕太著
榕樹書林 2022年

組踊は 1719 年に初演され、現在まで上演され続けている芸能であるが、その発生論については先行研究によって明確にされてこなかった。本書では組踊の誕生する時代背景を資料から読み取り、組踊誕生について試論を試み、さらに近世から本土復帰までの上演史を提示することで、組踊が時代とともにどのように歩んできたかを示唆している。また、後半では組踊の台本の校合を中心として、そこから考えられる新たな論考を示している。とくに役名や用いられる用語、さらにはこれまで明らかにされてこなかった奄美地域への伝播について考察している。本書を通して組踊という芸能の新たな可能性が示されている。

K/76/Su96/